

競技スポーツにおける試合の流れについて

1190526 早川 聖人

高知工科大学 経済・マネジメント学群

位置づけた。(図 1)

1. 概要

様々なスポーツで選手から「流れ」に関する発言がよく聞かれる。実際、木戸(2012)によれば、スポーツゲームの実況者や解説者からも同様に、ゲームの様子をこれらの言葉で表現し、スポーツ観戦者にゲーム状況を抽象的に伝えている。しかし、具体的に「流れ」の正体を示すものではなく、その意味は多岐にわたり、勝敗や成功に大きく関わっている。

手束(2010)によれば、「スポーツの試合はこうした番狂わせが時として起こりうる。特に球技の場合は短距離走や跳躍競技、競泳のように人間の絶対能力だけでないものが作用する分だけ、番狂わせが起こる可能性も低くない。」と述べており、各スポーツにおける間接的諸条件が、選手に何らかの影響を与え、普段起こりえない状況が生まれることを示している。つまり、ルール上、選手の絶対能力が直接的に反映されず道具の使用等によって間接的に作用するスポーツにおいては、番狂わせが起こりやすくなるといえる。バレーボールは、ネットを挟んでボールを使用するが、身体条件が強く競技と関連性を有しており、選手が持つ絶対能力が試合に影響することは間違いない。だが手束は、『流れ』が見えやすい球技は、バレーボールである」とも述べていることから、バレーボールにおける選手の絶対能力以外に何らかの影響を受けていると考えられる。特にボールを保持し自ら考える時間がないというルール及び競技特性が深く「流れ」に影響していると考えられる。

バレーボールゲームにおける「流れ」の構造を明らかにすることを目的に研究を行った木戸(2012)によれば、バレーボールゲームにおける「流れ」の構造は、【見えない悪循環】 【見えない好循環】 【審判の強制力】 【時間的猶予】の4つの概念

によって構成されていると考え、また、4つの概念を包摂するコア・カテゴリーを『コートをめぐる主観的ゆらぎ』として

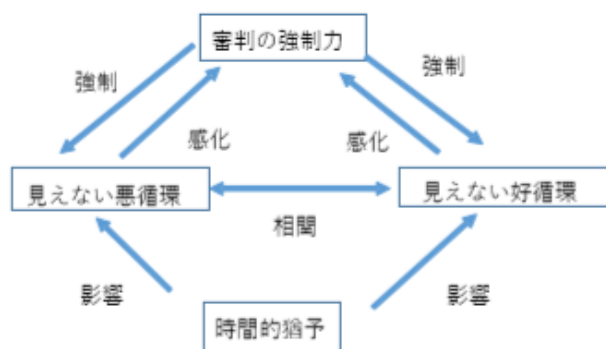


図 1：バレーボールにおける流れの構造

(手束(2010)の基つき著者が作成)

川端(2017)によれば、バレーボールの試合の中で一方のチームにおける諦めの強さと他方のチームにおける勝利の確信の強さは同じ強さで推移しているわけではない。また、一方がミスをして流れを失ったと思う程度と、他方が流れが来たと思う程度はほぼ均等である。

2. 目的

木戸(2012)、手束(2010)、川端(2017)、いずれの先行研究も団体競技において同一チームの中における流れの解釈の違いがありえるということは記述していなかった。そこで、本研究では、味方チームのなかで「流れ」や「プレー」の解釈についてずれがあるのかについて明らかにすることを目的とする。

3. 研究方法

3.1 調査方法

四国大学バレーボール連盟の1部リーグに所属する、高知工科大学女子バレーボール部と土佐女子高校バレーボール部に

協力してもらい練習試合を撮影した。その後、高知工科大学のセッターとリベロに個別でビデオを見ながらインタビューを行った。その際、選手独自の考えを知るために「流れ」の定義や本研究における詳しい内容については省略した。

(1) 対象者の選定とその性質

前述にあるように今回の実験の対象者は高知工科大学女子バレーボール部のセッターとリベロである。(箕輪 吉田 2001)よりセッターはチームにおいて最も重要なポジションであると解説している。

リベロは、キャプテンであり、守備の要ということから選出した。セッターは扇の要ともいえるポジションのため試合における特定の出来事に対する認識の「ズレ」が見出しやすいのではと考えた。

3. 2 調査対象者の概要

本研究でインタビュー調査となった者の概要を述べる。X氏(セッター)、Y氏(リベロ)、は高知工科大学女子バレーボール部所属である。

試合日時：11月22日 19:00~21:00

試合場所：永国寺キャンパス体育館

インタビュー日時：12月3日 14:00~15:30

対象者=X氏(セッター)

12月3日 18:00~18:50

対象者=Y氏(リベロ)

インタビューの音声はすべて録音し、書き起こしを行った。書き起こしのページ数はA4用紙27ページである。

4. データ収集結果

試合の概況は以下の通りである。高知工科大学は序盤、中盤と連続得点を重ね大きくリードする。しかし、17-7の時、高知工科大学の選手がミスをし、その得点をきっかけに、土佐女子高校が5連続得点を取った。その5点中、3点が高知工科大学のアタッカーのミスによるものだった。この後は体勢を立て直し、シーソーゲームで高知工科大学が勝利した。(図2)

得点		得点内容
工科大	土佐女子	
0	0	
1		
2		土佐女子 ミス
	1	
3		Z氏 アタック
4		土佐女子 ミス
	2	
5		土佐女子 ミス
	3	
	4	
	5	高知工科 ミス
6		
7		
8		土佐女子 ミス
9		
	6	
10		
11		
	7	
12		Z氏 アタック
13		土佐女子 ミス
14		Z氏 アタック
15		X氏 サービスエース
16		X氏 サービスエース
17		土佐女子 ミス
	8	Z氏 ミス
	9	Z氏 ミス
	10	
	11	
	12	Z氏 ミス
18		
	13	
19		Z氏 アタック
	14	
	15	
20		
21		Z氏 サービスエース
	16	
22		
	17	
	18	
23		
	19	
	20	
24		土佐女子 ミス
25		Z氏 アタック

図2：調査したセットの得点の流れ

この土佐女子高校5連続得点をもたらしたきっかけである17

-8となる場面に注目する。17-8となる場面を開設すると、以下ようになる。

Y氏ではない選手のパスがSさんにとって都合のいいところへ返球されない
↓
セッター(X氏)がいい体勢、場所からアタッカー(Z氏)にトスを上げることができない
↓
セッター(X氏)がトスを上げたいところに上げられない
↓
アタッカー(Z氏)がいい体勢でアタックを打つことができない
↓
アタッカー(Z氏)がコートを外れるミスをしてしまう

4. 1 セッター(X氏)のこのセットの意味付け

以前の練習の中から、トスが悪いときのアタック練習に対する意識がチーム全体で低いということが気になっていた。

セット序盤、アタッカーの打てる体勢までの準備が遅く、得点を取れるところで取ることが出来なかった場面や、試合でよくやられるフェイントボールで得点を取られること、ブロックが揃わないというところが気になった。

中盤では、攻撃は単調になっていたが、決まっていた。セッターからの視点からは攻めてほしいところで攻めてくれない、相手を見てうまく返してほしいところで思い切り打っているように感じた。

終盤では、ラリー中に連携攻撃が出来なかった。相手に5連続得点を取られた時(流れが悪い時)アタッカーのミスが続いた。

流れが悪い時に止められないというスパイカーの悪い部分が露呈したセットであった。

4. 2 リベロ(Y氏)のこのセットの意味付け

Oさんにうまくトスをあげられていなかったため、このセットでは、トス上げることがあればOさんを中心に上げようと決めていた。

序盤では、以前から改善しようといっていた、センターがレシーブに入っている時のブロックの位置が改善できていないことから大きくリードできなかった。

中盤では単調な攻撃になっていたが、相手のミスや、2本のサービスエースなどから6連続得点するなど大きく離すことが出来た。

しかし、終盤、スパイカーのミスが多いことや、ライトからクロスに打たれるボールに対応できず、点差を縮められた。その後、体勢を立て直したが、ブロックの配置や、サーブをノータッチで落とすなど課題が多く見つかった。

ブロッカーとレシーバーの位置関係が悪く、相手にアタックを決められることが多かったり、スパイカーのミスが多いなど、以前から課題としていることが浮き彫りになったセットであった。

4. 3 アタッカーである早川の目線から推測したZ氏のこのセットの意味付け

序盤、ブロックとレシーバーの位置関係が悪いことや、ラリー中のレシーブが全体的に雑、ということからAチームがバタバタしていた。

中盤、軟打やフェイントから乱されることが多かったが、Bチームのミスや、2連続サービスエースによって連続得点を重ねることが出来た。

終盤では、スパイカーのミスが増えた。しかし、内容は何とか得点を取ろうと空中で打つ方向を変えてアウトになるというものであった。センターからの攻撃に対して、2枚のブロックをそろえるということがチームの中で決められていたが、つくことができていなかった。相手の体が外に向いていてあからさまにブロックアウトを狙ってきているにもかかわらず対策が出来ていなかった。

どうにかして得点を取ろうという積極的な姿勢がミスにつながった面はあったが、これから練習の中で改善していく必要性が明らかになったセットであった。

5. 実験結果

今回の調査の中から2つのことが明らかになった。1つ目はアタッカーから見ると積極的な姿勢から生まれたミスであっても、他の味方はただのミスと解釈していたことから、味方チームの中で特定のプレーの試合全体の中にどのように位置づけるかが異なっているということが明らかになった。2つ目は、今回のインタビューの中で、過去の練習や試合の記憶の中からミスについて意味づけをしている場面があったこと

から味方間のプレーの意味づけについては過去のプレーから大きな影響を受けるということが明らかになった。

6. 結論

木戸の論文（2014）では、一方のチームにおいて、いい流れになっている場合に相手のチームではマイナスの流れになっているという対照性が仮定されていた。

川端の論文（2017）では、これに対する疑いからはじまり、両者の間で必ずしも対称性はないという結論が記述されている。

今回の研究はさらに研究を進めて同じチーム内でも自分のチームの流れ、プレー（特にミス）に関しての解釈が不一致であるということが明らかになった。

この研究は、木戸、川端の研究とつながりのある研究である。

7. 今後の課題

1 つ目はバレーボールのような展開の早いスポーツではインタビューの際、記憶が曖昧になる場面があり会話データの分析が出来なかった部分があった。今後、他のスポーツでも解釈のズレが起こるのかを検証していきたい。

2 つ目は練習試合と公式戦ではモチベーションが異なるため流れの分析に影響が存在するのではないかと予想される。

3 つ目は、今回は同チームの中の二人を対象とした実験を行ったが、指導者間やコート外の選手でもプレーに対する解釈のズレは存在するのではないかと思われる。

7. 参考文献

[1]木戸卓也(2012 6月)

バレーボール研究第14巻 第1号

バレーボールにおけるゲーム中の「流れ」に関する社会的考察
一大学生プレイヤーの会話データに対する質的分析作業をもとに一

[2] 川端勇輔(2017) 競技スポーツにおけるゲームの流れについて